

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ 一間 (はざま) から読む聖書—
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)

目次

- 敬神愛人をビジネスの観点から考える… 皆川 芳輝 (3)
- 大切にしている3つの言葉…………… 岡西 哲夫 (6)
- 分け隔てしない神…………… 長田 康志 (9)



敬神愛人をビジネスの観点から考える

皆川 芳輝

商学を研究していることもありまして、建学の精神である敬神愛人が、ビジネスにとっても大切であるということ、大学での勉強においても重要であるということをお話します。建学の精神は、神を敬い隣人を自分のように愛しなさいということです。これは信頼に繋がっていると思います。人と人との信頼です。信頼とはなにかについては専門ではありませんが、私見で言うところのような感じのものではないかと思っています。すなわち、私の目の前にいる人、彼女または彼が自分の利益を犠牲にしてまで私のために尽くしてくれる、決して自分が楽になるということではなく、その「人と人との関係性」のことだと思います。信頼は社会や人間関係の基盤中の基盤です。昨年、法律が改正され、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられました。もうすぐ法律改正後初の国政選挙が行われます。現在の在校生全員が国政選挙に臨むこととなります。つまり、学生全員、義務として信頼のできる政治家を選びます。選挙なくして国の基盤は成り立ちませんので、そこで

も信頼がキーワードになります。世の中は信頼を失うとどのような社会になってしまうのか、そのことを考えると非常に恐ろしいです。

企業においても、もちろん信頼は重要です。混沌とした時代だからこそ、ビジネスでは究極的に、信頼を復活、構築、さらに強化することに努め、それに成功している会社が実はパフォーマンスが非常に良いと言えます。そのことについて簡単にお話します。いろいろありますが、企業において信頼が特に最近重要になっている例を1つだけ話します。当地区は自動車産業が盛んです。1台の自動車を作るにあたり車種によって違いますが、だいたい3万個の部品が必要になります。そうすると1台の自動車を消費者に届けるためには、まず部品を作り、部品を加工して中間品を組み立てて完成品を作り、それを消費者に届ける、こういう役割が必要になります。この流れの全てをあわせて（フルセットを）一社もっている会社は皆無に等しい。3万個の部品が必要ですから1つの部品を1つの会社が作るとすると、3

万社の部品メーカーが必要になります。もちろん3万個の部品の内、複数の部品を作る会社もあるはずですが、概算で3万社の部品メーカーが存在します。3万個の部品を中間製品に組み立てる機能を持った会社もあります。さらに出来上がった製品を消費者に届けるために、自動車ディーラーがあります。部品メーカー、完成品メーカー、販売会社、および運送会社などが参画し、それらの会社の協力協働によって初めて自動車が消費者に届けられることとなります。消費者にとって魅力ある自動車の提供は、川上から川下まで様々な独立した会社が参加することで成し遂げられています。それは自動車にかぎらず他の製品、サービス、および公的なサービスも同様です。すると何が重要なのか？それぞれ機能を持つ会社が優れた専門的な知識をもっていることも重要ですが、やはりそれぞれの会社が連携し協力し合ってより良いものをすみやかに消費者に届ける役割分担が不可欠です。ある一つの会社が横着して手を抜いた、そのことによって最終の製品が届けられるまでに時間がかかり、苦情が出てきたとします。たった一社の怠慢で残りの会社のそれまでの努力が無駄になり、無駄になるどころか、怠慢だった人を含め関係

したグループパートナー全員が不評を買う、という構図になります。そのことによって関係の会社の業績が大幅に落ちますので、全員が協力し、信頼関係を構築する、一層強固にするという努力が必要になります。そのためにいろんなことを会社はやっています。詳しくは商学を勉強してもらえればと思いますが、簡単にいうと、リスク、費用、営利会社ですから利益、それらを分配していくという方法があります。会社が良い方法を検討し、実施していく。重要なことは、少なくとも力のある人が他の人の協力した成果を奪い取ってしまうということはあってはいけないということです。いろいろな成果や、そこに到達するまでの努力に基づいて全体の成果を配分していく、そのことによってだけで信頼関係ができるというのは世知辛いような気もしますが、もちろん根底に日頃の行いなどが人間ですからいろいろなところに響いていくということが実際あります。信頼は会社において、混沌とした時代だからこそ人と人との間の、また取引先との間の信頼が必要になります。取引先を搾取し一時的に成果を上げることができたとしても、中長期的にはパフォーマンスが落ちていくということを会社の人が一番よくわかっていますから、実務ではさ

まざまなマネジメントを工夫しています。

最後に、大学での学びについて話します。大学ではアクティブラーニングなど、グループで行う勉強が非常に重要になっています。各グループのディスカッションに参加し、そこで各自の専門的な知識を埋めあい、全体の成果をあげていきます。その過程の中で各自がさらに自分の専門知識または自分の知らないこと

を身に付け知識を高め、最終的にグループ学修を通じて人格を養うことが非常に重要になってきています。したがって、チャペルアワーやカレッジアワーではキリスト教に触れることが重要です。せっかく名古屋学院大学に入学したわけですから、そういう機会をもち、ぜひ敬神愛人の理解を深め、学部学科の授業に活かしていただきたいと思います。

(みながわ よしてる 商学部長 2016.6.30 カレッジアワー奨励)



大切にしている3つの言葉

岡西哲夫

今まで多くの人と出会い、お話を
して聞いた言葉のなかから、私がい
つも心の中で大切にしている3つの
言葉について話します。

私は理学療法士です。私が理学療
法士になり5年ほど経ち、臨床を通
して研究を始めた頃のことです。私
は研究をどうやって進めたらいいの
かわかりませんでした。振り返って
みますと、その当時、私は研究に関係
があり、興味のある患者さんは熱心
に診ていました。一方、どちらかとい
うとあまり研究に関わらない患者さ
んは熱心に診ていなかった、つまり
偏って診ていたような気がします。
そのことについて整形外科の恩師が
私に言葉をかけてくださいました。
それは、「一例一例を大切に」という
言葉でした。言い換えれば、一人一
人を大切にと言う言葉です。臨床の中
では、研究への関わりのあるなしで
はなく、公平に診ることがとても大
事だということを教えてくださいまし
た。私はその言葉を今も大事にし
ています。どうしても自分の興味あ
ることについては熱心になりがちで
すが、興味がないとあまり診ない。そ

うではなく、どの患者さんでも一人
一人を大切にするとということがとて
も印象に残っています。

次の言葉は、私が臨床の場から教
育の場に入った頃の話です。臨床と
教育の場とはやり方が違ひまして、
学生さんとの話の仕方、どうやって
授業を進めたらいいのかわかりま
せませんでした。その時に初代の校長先
生が話してくださいました。それは、
こういう言葉です。「学生は本当のこ
とはわかってないんです。花を教え
るよりは幹となるあるいは根っこと
なるところを教えなさい。」私はその
言葉の意味を当時はわかりませんで
した。ところがその校長先生が事情
で広島に帰られまして、学長になら
れました。その大学の寄稿というか、
研究報告書があるのですが、そこに
こういう言葉を残されていました。
「大学教育とは木の芽前の準備のよ
うなもの。学生は木の芽として卒業
し、社会に出てから花が咲く。数年も
すれば実を結ぶであろう。」私はこの
言葉を読んだ時に、「学生は本当のこ
とはわかってないんです。そして花
を教えるよりは幹となるあるいは

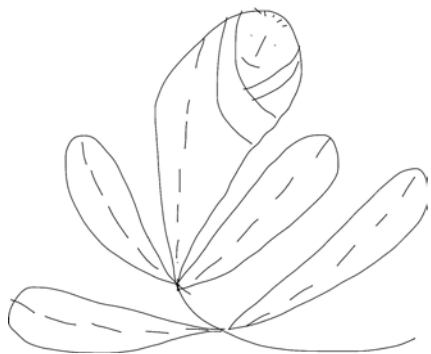
根っことなるところを教えなさい。」
という言葉の意味が初めてわかりま
した。学生さんは「わかりました。」と
言いますが、実は表面的にわかった
というだけで、その内容の意味、熟知
と言う言葉がありますが、本当にそ
の言葉の成り立ちということには気
が付いていないから、そういうところ
を君たちは教えてあげなさい。ど
うしても花を学生の頃に咲かせたい
と思うけれど、社会に出て花となっ
て実を結ぶのです。つまり自分たち
の後継者をつくるという気持ちにな
りなさい、そういう意味だったので
す。今も覚えている大切な言葉です。

最後の言葉は、臨床実習にいった
頃に出会った障害をもった女の子に
まつわるものです。臨床実習は座学
とは違い、体験することに意義があ
りますが、どのように体験したらいい
のかわかりませんでした。特に障
害をもった子どもの患者さんにどう
やって接したらいいのかわかりま
せませんでした。その時に、幼い少女に出
会いました。その少女は足に障害を
もっていました。足の指が変形して
しまい、それを治すために硬い靴(装
具)を履いていました。私と少女があ
る朝、歩行訓練のために出かけまし
た。すると朝露でその装具が濡れて
しまいました。ですから少女は靴を
脱ぎました。そうしたところ変形し

た指が見えたわけです。私はその時
にとってもショックを受けました。今
でもはっきりと覚えているぐらい
すごいショックでした。それでどう
やってその少女に言葉をなげかけた
らいいか、どう接したらいいのかわ
かりませんでした。実はその時はそ
れだけで終わってしまいました。何
十年も経って、私は教育の場に入り、
リハビリテーション概論という授業
を担当するに当たり教材を探してい
ました。そうしたところ、ある言葉に
出会ったのです。それは障害児福祉
に貢献された、滋賀県の琵琶湖学園
(障害児施設)を創設した糸賀一雄さ
んという方がいらっしゃいまして、
その人がこういう言葉を言われてい
ました。「この子らを世の光に」、とい
う言葉です。実はその当時は、「この
子らに世の光を」、という言葉が一般
的でした。つまりどういうことかと
いうと、この子らは不自由で恵まれ
ていないからこの子らに世の光を、
つまり社会福祉を投げかけようとい
うふうにいわれたわけです。ところが
糸賀さんは「そういうことではな
いんだ、この子らを世の光にするん
だ。この子らが主役なんだ。」という
ようなことを言われているのです。
私はその言葉に出会った時にとても
感動しました。そして少女と出会っ
た時に私は何も言えませんでした

が、「この子らを世の光に」、と言う言葉を知り、この少女を世の光にすればいいんだ、ということに何十年か経って気づきました。私はなんとかしてあげようと、どうしても上から見る目線になってしまっていました。でも大事なやはり患者さんが中心になることです。この子らを世の光にして、そしていろんなことを教わろう、そういう言葉を教わり

(おかにし てつお リハビリテーション学部教授 2016.11.4 カレッジアワー奨励)



ました。

以上3つの言葉について話しました。皆さんがこれから社会に出て多くの方と出会うと思います。そして多くの方たちと話をすると思います。そのことを大事にもらって、その言葉の中にある意味を十分噛みしめていただきたいのです。この話がすこしでも心に残ればと願っています。

分け隔てしない神

長 田 康 志

そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。神がイエス・キリストによって——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせ、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

(使徒言行録10章34～43節)

今日読んだ聖書では、初代教会の12使徒の筆頭であるペトロという人が異邦人、つまりユダヤ人以外の人、名前はコルネリウスという人ですが、コルネリウスの家に招かれて初めて異邦人に福音を宣べ伝えたという内容が書かれています。最初にペトロが異邦人の人々に告げた福音の第一声を読み返すと、『ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。』この一言です。人を分け隔てしない、どんな人も平等に扱うということです。私たちは普通、神様というのは公平で、誰でも愛し、誰でも救いを求める人は救ってくれるというのが、多くの日本人の考えであり、常識です。でも当時のペテロたちの時代、今から2000年前のイスラエルではそんなことは非常識なことだったわけです。神様は神様が選んだ民イスラエルだけを愛される、ユダヤ人を特に愛しておられる、だから異邦人というのは元々穢れた民であって不信仰な人々だと思われていました。異邦人とユダヤ人が交わることさえタブーとされていた、それが当時のユダヤ人の常識だったわけです。でもそのユダヤ人の常識を破ってペトロは異邦人のところに行って福音を宣べ伝えたと書いてあります。その発端となる出来事が今日読んだ箇所

前、使徒言行録10章1節からの部分に記されています。

かいつまんで申し上げますと、ペトロがヤッファという街に滞在しておりました時、彼は習慣にしたがって昼の12時頃家の屋上に昇って祈りの時をもっていました。すると非常に不思議な幻を見ました。それは天から大きな風呂敷のようなものが吊り下げられてきて、それが開くと中にいろんな動物が入っています。そして天から声がして「ペトロよ、これらを屠って食べよ。」と言います。ところがその動物は、ユダヤ人が食べるはならないとずっと禁じられていた、いわゆるユダヤ人にとって穢れた動物でした。今でもユダヤ教の厳格な食生活を守る人はまず豚肉は絶対食べないですし、他にも脂身は食べません。血の付いたままの肉は食べてはいけないためステーキは食べられない、そういった食物のタブーがあります。ところがそれらのタブーをひっくり返すような、食べてはならないといわれている動物がいっぱいです。そこでペトロは思わず「神様とんでもない、私は穢れたものなど今まで食べたことはありません。」と拒絶します。絶対に食べられない、無理ですというふうにところが神様は「私が清めたものを穢れているなどとあなたは言うてはならな

い。」こう言いました。この幻が3度彼の前に展開したとあります。異邦人のコルネリウスも祈っている時に神様から示しを受けます。「ヤッファという街にペトロという人がいる、その人を招いて福音を宣べ伝えてもらいなさい。」そのような幻でした。そこでコルネリウスは使いを送ってペトロを呼びました。ペトロは自分が見た幻の意味はこのことではないかと思って、異邦人のコルネリウスのもとに向かったということです。

それで今日のところが始まるわけです。その時にペトロは、「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」こう言ったのです。神様は人を分け隔てなさないことがよくわかりました、と言ったのはそれまでペトロは自分がそのことをわかっていなかった、自分はユダヤ人として異邦人に対して今までのユダヤ人の常識を覆せない、異邦人にまで福音を述べ伝えるなんてまったく考えてもおらず、異邦人は福音の対象でもなんでもなかったということです。ところがペトロがその幻を示され、異邦人に福音を語り始めます。それはまさに彼にとっては驚天動地の出来事です。異邦人のコルネリウスと出会って、

初めてペトロは「ああ、今まで自分が考えていたことは間違っていたんだ。本当に神様は人を、ユダヤ人も異邦人も分け隔てなさないんだ。」と実感したということです。そのことを考えた時、私たちもしばしば自分がこうしてはならない、自分はこうあるべきであるというような、自分にとっての常識、固定観念のようなものにとらわれていることがあります。固定観念にとらわれている時は、自分は正しいと、自分と違う考え方や行動をする人間に対して非常に批判的に「あいつはダメだ。」とか「こんな人間はダメだ。」と相手を下に見てしまうことがよくあります。しかしそういう偏見、差別はある意味、宗教的などころから発しています。宗教は元々ある種の差別、自分たちは選ばれた、あの人たちは選ばれていない、そういった差別が宗教の価値観の中にあることは事実です。元々ユダヤ教もそうです。でもその時はそれを覆すような新しい力が自分の常識の外からやってくる、これが聖書のいう聖霊の働きです。私たちが日本で聖霊と聞くと、普通はフェアリー、つまり精神の世界、自然の不思議な妖精のような気がしますが、聖書の語る聖霊は、神様が人間に送った霊、神の霊、イエス様の霊、そしてまさに言葉の霊です。あなたは語れ、

あの人たちに福音を伝えなさい、その時に聖霊の働きがその人を押し動かすものです。ペトロの場合は、まさか異邦人のところに自分が行かなければいけないのか、そう思っている彼の背中を押したのが聖霊の力、導きだったといえます。私も35年間牧師をやっておりますので、こういうところで聖書のお話をするのはまさに聖霊の働きがあるからだと思っています。でも、やっぱりはたして聖霊は自分のところに来てくれているのか、時々自信がなくなります。自分のような人間が語ってもあんまり人は聞いてくれないのではと、自分の無力さを感じる時があります。しかし聖霊は人間がどんな状態であろうと神様の御心を現すために、私たちの中に新しい風を起こしてくれる、そういう風のようなものです。先ほども言いましたが、人間は固定観念にとらわれるとなかなか抜け出せません。ペトロがユダヤ人は異邦人と交わってはいけない、そういう固定観念を新しい風によって吹き飛ばされ、異邦人と出会って初めて自分は神様の気持ちがわかってなかった、そういうことを気づかされた瞬間が今日のところに描かれています。神は人を分け隔てなさらない、そのことがよくわかった、というのが彼の実感であったろうと思います。

私も固定観念といいますか思い込みが強く、時々それで失敗します。ある時こういうことがありました。犬山に日本モンキーセンターがあります。そこはいろんな種類のお猿さんがいっぱいいます。他にもいろいろな動物も飼っています。私が妻と一緒にモンキーセンターの園内を散歩していた時のことです。飼育員の人陸ガメを散歩させている姿が目に入りました。陸ガメは大型のカメで、のそのそとゆっくりと歩くイメージがありました。その陸ガメを見たら足が速く、飼育員さんが芝生の上に乗せると、そのうち道をそれて人が歩くアスファルトの上に来て来ます。飼育員さんが慌てて芝生の上に引き戻すと、また勢いよくやって来るので、陸ガメはとても足が速いと感心して見ていました。飼育員さんが熱心にカメを見ている私に気が付いて、「このカメまだ子どもなんです。でも大きくなると80キロになるんですよ。」と言ったので、私はびっくりしまして、「ええっ、このカメそんなに速く走るんですか。」と言ってしまいました。そうしたら隣にいた妻に「何バカなことってんのよ、そんなに速く走れるわけがないじゃない。体重のこと言ったのよ。」と怒られましてね。本当に考えてみたらその通りです。時速80キロメートル

といったら自動車のスピードです。飼育員さんも私の返答を聞いて笑って、「いやー、この子がそんなに速くなったら高速乗っちゃいますよ。」と言いました。飼育員さんうまいこと返してくれたな、と感心しました。でも感心している場合じゃないですね。私は自分がいかに非常識かという恥を晒したわけです。妻も非常に恥ずかしい顔をして横で睨んでいます。でも私自身はカメが予想以上に速く歩くため、80キロと言われた時にそれが体重のことよりもスピードの単位だと思ってしまいました。そんな非常識な間違いをする人間も少ないと思いますが、人間というのはどこかで思い込んでしまうとそこから抜けられなくなってしまいます。ある種の自分自身の固定観念にとらわれてしまい、それ以上の可能性を自分自身で拒絶してしまうことがあります。

今、ヘイトスピーチという問題があります。韓国や北朝鮮の在日の人たちに対する差別発言、これを表現の自由だという人もいますが、ヘイトスピーチは自分たちと異なるものを排除する、そういう言葉であります。結局これはユダヤ人が異邦人を差別していたのと同じことです。自分たちは正しいんだ、お前たちは間違っている、そうやって人を分け

隔てし、分け隔てすることで自分たちの正しさを主張しようとする、そういう人間の気持ちが憎しみの言葉、人を排除する言葉になって現れるわけです。しかし聖書にはそのような憎しみ、そのように異なるもの同士が排除し合う、そういう世界に対して聖霊を送ったとあります。もう自分の思いだけ、自分の判断だけ、自分の固定観念だけで生きてはならない、むしろ違ったもの同士を本当に愛によって仕えあうものとして変えてくれる、それが聖霊の働きです。だから聖霊がしばしば人間の妨げをするという表現もあります。聖霊に妨げられる、自分がやろうとしていることを邪魔してきます。なんでこんなことになったかわからない、というような自分の思い通りにいかない現実にもぶつかることがあります。でもむしろ邪魔されて行った方向、別のところに行かざるをえなくなった方向に行って初めて、こっちの方が正しいということに気づかされる時があります。これが私たちにとって聖霊の働きです。聖霊の妨げです。私の妻は私のことを妨げることがあります。「なんであんたはこういうことをするの。」「なんでそういうことを言うの。」と、しばしば私を妨げます。嫌なやつだな、と思う時がありますが、そういう自分と違った考え、価値

値観を持つ存在が必要だとつくづく
思います。自分の考えだけでいった
ら自分はとんでもない人間、ものす
ごく傲慢で、ものすごく人を人だと
思わない本当に自己中心的な人間に
なっていたと思います。私たちが聖
書から教えられることは、本当に神
様は人を分け隔てしない、分け隔て
なく愛するし分け隔てなくお前はそ

れでいいのかとしばしば私たちの道
を妨げることがあります。その妨げ
られた結果が本当に人と人とが愛し
合うべきそういう方向へと繋がって
いるとしたら、妨げられることさえ
も私たちにとっては祝福であり恵み
であると、そのことを覚えていきた
いと思います。

(ながた やすし 日本基督教団 広路教会牧師 2016.6.7 チャペルアワー奨励)

